

漢字の形の構成や用法に関する六つの種類を「六書」といいます。学者は漢音で読みたがりますから「リクシヨ」と読みます。でも「ロクシヨ」と呉音で読んでもかまいません。

数を読むときは、呉音のほうが親しみやすいのです。イチ、ニ、サン、これはすべて呉音読みです。漢音で読むと「イツ」「ジ」「シン」になります。

象形(シヨウケイ)、指事(シジ)、会意(カイイ)、形声(ケイセイ)、転注(テンチュウ)、仮借(カシャ)の六つの用法を合わせて六書といえます。そのうち象形と指事は「文」です。文字のうちの文にあたるものです。会意、形声は「字」です。

すなわち象形や指事は組み合わせの親になるものであり、これらが組み合わせさせてできるのが、会意、形声という子なのです。

「象形」というのは、ものの形を書き表したものの、象というのは、日本語で読むと象る(かたどる)という意味です。

ものの形を象る、例でいえば、お日様の形を象ったものが「日」という字です。お月様の形を象ったものは「月」になり、山の形を象ったものが「山」になります。日、月、山、川、人、馬などを象形といえます。漢字

はよく象形文字だといわれますが、すべて象形文字というわけではありません。

象形文字はほんの一部です。何万という漢字があっても、そのうちの百いくつぐらいしかありません。

「指事」は事柄、ものに対して、形のない心の中だけに存在するものです。上とか下とか、一・二・三・四などの数、大きいと小さいとか、こういうことを表したものです。「これは大きい」といっても、大きいという“もの”はなく、大きいという“こと”を示しています。

ですから、大きいと言われたものがもっと大きいものの前に出ると、今度は小さいという表現に変わります。

このような抽象的な事柄を表すことを「指事」といいます。事柄を指さすという意味です。

ポイント:優秀な学校へ入ると伸びる子どもと逆に落ちる子どもがあります。たとえば生徒を学力順に上・中・下とクラス分けして学習指導をすると、各クラスとも上位にある子は学力が向上します。ところが一番上位のクラスでビリの子どもは、不思議なことに中のクラスの上位グループより学力がはるかに下がってしまっています。つまりいい学校に入ったためにかえってダメになるときもあるのです。